

震二卯年十月二日夜四時

新吉原地震並出火之圖



新吉原地震並出火之図（東京消防庁 蔵）

幕末の安政2年(1855年)、10月2日の深夜23時に発生した安政江戸地震(M7.1)により、当時の江戸市中では約一万人あまりの死者を生じたと推定されている。この当時江戸は武家地が約6割の面積を、寺社地が約1割占め、残りの3割が町人地であった。この当時江戸市中の町人地には千余りの町があった。『破窓之記』という文献によれば、安政江戸地震によって死者を生じた町は473町であって、これらの町人地の町で合計4,726人が死亡したとなっている。

江戸時代に幕府公認の遊郭であった吉原は、当初日本橋の近くにあった。明暦2年(1656年)に起きた明暦の大火の後、浅草寺の北西方で、日本橋堤のすぐ南側に南北2丁、東西3丁の区画を定めここに移転することとなり、以後この新しい遊郭は新吉原と呼ばれた。

江戸時代以前にはこの場所は千束池とよばれる湿地であった。この千束池の湿地帯のすぐ東には隅田川が流れていた。当時の隅田川は荒川と利根川という、関東平野を流れる二大河川が合流して東京湾に注ぎ込む大河の下流部であった。暴れ川である利根川の下流部であった隅田川はしょっちゅう氾濫を起こして、新たに日本の事実上の首都となる江戸をおびやかした。千束池はこの暴れ川の氾濫原の湿地だったのである。

江戸を洪水の危険から避けるため、徳川家康は「会ノ川締切」の工事を1594年に実施して利根川を古河の付近で渡良瀬川に付け替え、さらに1654年に赤堀川を開削して関宿付近で常陸川に付け替えて暴れ川である利根川の本流を銚子に流し出した。この大工事によって、千束池の湿地は洪水の心配が大幅に減ったが、それでも隅田川はもう一つの大河である荒川の下流であることには変わりがなく、依然として洪水が千束池を越えて江戸を直撃する危険は去ったわけではなかった。そこで幕府は江戸を隅田川の氾濫から防ぐために、江戸と

隅田川の間には日本堤という堤防を築いた。江戸の町から新吉原に行くにはこの日本堤上の道路を歩いていくこととなった。

新吉原は、周囲は幅五間(約9m)の「おはぐろどぶ」と呼ばれた堀で完全に囲まれ、外部との出入りは日本堤に通ずる大門口(おおもんぐち)ただ一か所であった。安政江戸地震が起きる約10年前の弘化年間(1844年～1848年)には、この狭い吉原には妓楼と茶屋あわせて約500軒、そこに約7,000人を越える遊女がいたと記録されており、地震当時もほぼこれだけの遊女がいたものと推定される。

新吉原の大門からは仲ノ町と呼ばれる街路が南北に貫き、江戸屋町一丁目、二丁目、京町一丁目二丁目、揚屋町、それに角町の六つの町からなっていた。そうして一番西側に京町一丁目と二丁目が配置されていた。安政江戸地震のとき、もと沼地を埋め立てて作られた吉原の土地は軟弱で、特に揺れがきつく現れた。その上に建っていた妓楼や茶屋は、強い揺れに倒壊し、その上江戸町一丁目などから出火した火がたちまち吉原全体の家屋を焼き尽くした。今回取り上げる絵には、倒れてくる家屋、迫ってくる火に逃げ場を失った遊女とその客たちの混乱を極めた様子が生々しく描かれている。

『破窓之記』によると新吉原を構成する六つの町での死者は合計683人であるが、このほか名前不明の死者が444人を数えたと記録され、結局この狭い新吉原で、1,127人も死者を出したことになる。その多くは、親元から売りに出され、この新吉原という苦界(くがい)に身を置く遊女たちであった。遊女たちの亡きがらは「投げ込み寺」と呼ばれた三ノ輪の浄閑寺(じょうかんじ)に合葬された。「生きては苦界、死しては浄閑寺」と川柳に詠まれている。

都司 嘉宣

(独立行政法人建築研究所 特別客員研究員)